

東京都小中学校環境教育研究会会報 **東京の青い空** 第71号

会 長 関口 寿也 多摩市立連光寺小学校 TEL 042-373-1920

事務局長 伊藤 修久 世田谷区立玉堤小学校 TEL 03-3521-1164

HP <http://kankyokyoiku.jp>**その環境活動、ちょっと待って!!**

東京都立砂川高等学校(都立学校実習支援専門員)、自然ガイド

宮田 浩



私は東京都の御岳ビジターセンターと高尾ビジターセンターで解説員として自然を紹介してきました。同時に多摩市の小学校と保育園の川の活動の支援に携わり、現在は都立高校の仕事と共に自然ガイドとして東京の川と森を案内しています。

東京の山間部ではミソサザイの囀りが春の訪れを告げ、それに続きハナネコノメやコチャルメルソウが咲き始めます。4月下旬には東南アジアからオオルリやセンダイムシクイ等の夏鳥が飛来し、森にはムササビやテン、そして山の神とされるヤマネが暮らし、最近ではニホンカモシカと良く遭遇するようになりました。多摩川では天然遡上のアユが数を増やし、川と海を旅するモクズガニ、希少なホトケドジョウと多くの種類が生息しています。近年では上流域に生息しているカジカガエルが中流域にも姿を現すようになりました。このように東京には素晴らしい豊かな自然が残されています。

しかし様々な問題も生じています。山間部ではニホンジカの食害により地域植生が影響を受け、2019年からはナラ枯れが蔓延してナラ類やカン類等の樹木が深刻な被害を受けています。多摩川では第二のブラックバスと呼ばれるコクチバスが姿を現し、オオクチバスよりも目立つようになりました。また遊漁資源の増殖を目的として繰り返し行われてきた琵琶湖産アユの放流により、西日本由来の国内移入種であるタカハヤやカワヨシノボリ、そして琵琶湖固有亜種のスゴモロコが定着しています。特に多摩川の上流域では在来種であるアブラハヤがタカハヤと置き換わり、どこでも普通に見られたアブラハヤが東京都のレッ

ドリストで絶滅危惧IA類に指定されるほど激減しています。東京の山間部や河川ではこのように様々な問題が生じています。

ここ数年、環境問題への意識が高まり、「エコな暮らし」、「サステイナブルな社会」、最近ではSDGsという言葉をよく耳にするようになりました。個人あるいは企業として自然環境に対して何か行動を起こしたいという風潮が強まり、私のところにもクリーンアップ活動やSDGsツアーの依頼が増えています。ところが自然に優しい活動と思われていることが逆に自然を破壊する行為につながる場合があります。特に日本では「生き物を放す=環境に良いこと、優しいこと」という考えが古くからあり、そのことが問題を引き起こす要因となっています。

昨年6月、多摩川では河川工事業者が自然環境をより豊かにし、河川工事および水辺の環境への理解を深めることを目的として多摩市の小学生を招いてアユの放流を行いました。しかし多摩川では天然遡上のアユが増加しており、そもそも放流する必要はなく、前述のとおり国内移入種の侵入と定着の機会を増やします。一般的に「河川工事は自然環境を破壊する」という悪いレッテルが貼られていることから、自然に優しい活動を行う必要があると工事業者が考え、地域貢献の一環としてアユの放流活動を行ったと推測されます。

このように良かれと思って起こした行動が逆に自然を破壊する場合があります、「善意の環境破壊」と呼ばれています。自然環境の保全活動では、抱えている問題の本質をしっかりと捉えて、思いつきで安易に行動するのではなく、正しい知識を基に行動を起こすことが何よりも大切です。

環境絵画コンクール報告

『みんなでつくろう持続可能な社会』
『みんなで守ろう豊かな自然』
第25回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール

今年度も環境絵画コンクールを実施致しました。感染拡大防止の影響で開催が危ぶまれましたが、学校現場や関係団体などからの要望の声や協賛企業からの支援もいただけることで実施することが出来ました。

このコンクールは、「絵を描く」という児童・生徒にとって身近な方法を通して、環境への意識を高め自分たちの行動そのものが地球規模の環境の保全への第一歩であることを意識してほしいとの願いから、毎年開催しているものです。

『みんなでつくろう持続可能な社会』『みんなで守ろう豊かな自然』をテーマとして、文部科学省、環境省、日本環境協会の後援をはじめ、(株)みずほフィナンシャルグループ、明治安田生命保険相互会社、丸紅(株)、積水化学工業(株)の協賛をいただき、全国の児童・生徒を対象に5月中旬から9月12日までの期間で募集をしました。第22回から環境大臣賞の受賞作品が、環境省の環境白書の表紙絵に選定されています。

今年度はコロナ禍にもかかわらず募集期間中に、小学校の部 192 団体 3884 作品、中学校の部 252 団体 1269 作品、合計 5153 作品が、北海道から沖縄県まで全国各地から送られてきました。また、今まで応募されていなかった学校からの応募も多数あり、本コンクールの活動が広がってきていることが分かります

コロナ禍であっても、まさに児童・生徒の環境に対する興味関心や創作意欲は健在であったといえます。また、持続可能な社会に対する関心が高まる中、児童・生徒を文化的・創作的な活動に導いていただく環境を用意していただいた教育行政関係者をはじめ、協賛企業、関係団体様のご支援があつてのことだと思います。本当にありがとうございました。

【応募作品について】

- 主に次の基準に沿って審査を行いました。
- テーマに沿っている
 - 児童・生徒の意見や願いが分かる
 - デッサンや構成に工夫がある
 - 他の作品の模倣や類似ではない
 - その他、人権上の配慮 など

審査終了後、審査委員長の秀明大学教授 岡本昌己 先生からは、応募作品は構図のオリジナリティーがあり発想も豊かになっているとのご講評をいただきました。技術的にも高度で丁寧に仕上げている作品も多く、また環境への意識の高まりや日常生活で環境問題にどのように取り組むかということを伝えようとする姿勢も伝わってきました。

審査の結果、小中学校別に、文部科学大臣賞、環境大臣賞、会長賞、みずほ特別賞、明治安田生命特別賞、丸紅特別賞、積水化学特別賞（以上各1点ずつ）、佳作（小中各10点ずつ）のほか、学校賞として東京都文京区立千駄木小学校、茨城県笠間市立笠間中学校の受賞が決まりました。

【絵画コンクール表彰式の様子】



動物園研修会報告

動物園研修会

～井の頭自然文化園が伝える外来種問題について～

多摩市立連光寺小学校 校長 関口 寿也

2月4日(土)に井の頭自然文化園にて「外来種問題」をテーマにした研修会を実施しました。井の頭自然文化園・教育普及係である山崎彩夏氏、金原功氏を講師として、19名の参加者を集めての開催となりました。今回も反響が大きく、定員以上の応募がありました。対面の研修会の人気が伺えます。

研修会は、井の頭池の歴史とかいぼり、井の頭池の観察、日本動物園水族館協会としての環境保全活動の3部構成で進行しました。井の頭池の歴史は古く、縄文時代には湧水があったことがわかっています。高度経済成長期までは在来種の動植物の宝庫でした。経済成長に伴う地下水のくみ上げにより、現在は1日0.4tをポンプでくみ上げているそうです。近年は、外来種が増えてきたこともあり、井の頭自然文化園も協力して2014年から3回かいぼりを実施しました。その結果、水の透明度が上がり、在来種が復活し、水鳥も戻ってきているそうです。併設している水族館には、かいぼりの際に捕獲した大きなカミツキガメやバスが飼育されていました。また、動物園は在来種を保全する取組も行っています。東京都内では1か所しか生息していないアカハライモリを保全し、園内で繁殖もさせていました。

本研修会では、動物園(協会)の多様な取り組み、生態系の保全活動、繁殖活動の実際等を知ることができました。参加者一同、環境保全に対する思いを新たにしました。



ポンプでくみ上げている井の頭池の湧水

第54回 全国小中学校環境教育研究大会(東京大会) 報告

全国大会報告

東京都調布市立上ノ原小学校 校長 箱崎 高之

21世紀「環境の世紀」への提言

《研究主題》 「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」
～環境教育によって育む学力と環境保全意欲～

令和5年1月28日(土)、第54回全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)を、オンラインによる録画配信という形で開催しました。研究発表と講演会を中心に、全国から約100名の参加者がありました。それぞれの概要は以下のとおりとなります。

【研究発表】

- 1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進
～消費者視点から生産者視点へ・環境教育によって育む学力と環境保全意欲～
東京都小中学校環境教育研究会 会長 関口 寿也 研究部長 鈴木 元
- 2 自然体験学習を軸にした「森と海のつながりを学ぶ(水の循環)」学習
～「自然との共生・共存」をめざして～
千葉県南房総市立富山学園 校長 袴田 晃宏 教諭 篠原 準
- 3 ふるさと中標津で生きていく子どもを育む
～環境教育=今ここで生きる子どもの環境を日常の授業で活用すること～
北海道中標津町立丸山小学校 校長 横山 裕充

【講演】

国立環境研究所 生態リスク評価・対策研究室 室長 五箇 公一 様から「アフターコロナの自然共生社会」をテーマに、専門的な知識や科学的なデータを基にして「生物多様性はなぜ大切か」ということについてお話をいただきました。生物多様性の保全は、人間社会持続のための安全保障であるということから、人と自然の正しい共生の在り方として Zoning の考え方を示されました。そして、Humanity(利他的行動・思いやり・気遣い・愛情・・・)こそが人間最大の武器であると、多様性こそが人間社会の支えであると締めくくられていました。

令和4年度 第58回 東京都小中学校環境教育研究発表会
持続可能な社会づくりのための環境教育の推進
 ～消費者視点から生産者視点への環境教育によって育む学力と環境保全意欲～

I 主題設定の理由

これまで取り組んできた環境教育は、主に消費者の行動に視点を当てたものが多かった。例えば、「マイクロプラスチックを減らすためにプラスチックの消費量を減らそう」「食品ロスをなくすために買い物を工夫しよう」等の取組である。

しかし、今学んでいる多くの子供たちは、10年、20年後消費者としてだけでなく、生産者として社会に出ていく。そのため、今の学びを次の世代に繋げるためにも生産の過程から消費の段階の全体を視野に入れ、環境保全意欲を高めてく必要がある。これにより、我々の日常生活における生産や消費の活動すべての場面で、環境保全を意識して行動しようとする心を培うことができる。

これまで本研究会が取り組んできたESDは、その実現を可能にすると信じる。それは教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。

II 研究の方法

- 1 役員定例会で理論構成
- 2 本研究会で作成した「新しい環境教育」で示した児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、研究部において授業開発、授業実践を行う。
- 3 研究発表校、研究部員所属校、外部機関と連携し研究実践を深める。

III 研究の過程

- 1 学校現場でのESDの推進状況の確認
- 2 昨年度の研究成果の検証
- 3 企業（味の素㈱）との連携による生産者視点を取り入れた授業開発
- 4 研究部員の学校における授業実践
- 5 ポートフォリオによる授業検証

IV 授業実践例

1 第5学年「つくる責任・つかう責任」

(1) 育てたい資質・能力

ア 生産から消費の繋がりの中で、様々な環境課題を見出すことができる力

イ よりよい環境を求め維持していこうとする意欲

ウ よりよい環境を求め、自らすすんで行動する力

(2) 単元のねらい

ア サプライチェーンの視点をもつことで、生産から消費に関連する様々な環境課題を知り、その解決策を考える。

イ 環境課題を自分事と捉え、今の自分に何ができるかを考え、行動する。「サプライチェーン」における環境保全の取組を知る。

(2) 単元計画（12時間）

順	授業名	時数
1	2100年の未来天気	1
2	もったいないを考える	1
3	ものづくり・「[ほんだし®]のひみつ」(リモート授業・事前事後含む)	3
4	“つくる責任”“つかう責任”～持続可能な人と企業と食の未来授業～(出張授業)	1
5	探求学習	3
6	まとめ・発表	3

(3) 授業開発

上記の単元の中で、新たに味の素㈱とともに『“つくる責任”“つかう責任”～持続可能な人と企業と食の未来授業～』の授業開発を以下の通り行った。

<本時の指導のねらい>

(ア) モノの流れ（原料から商品）を考え、サプライチェーンから物事は一つ一つ繋がっていることを理解させる。

「工場で商品をつくること」「みなさんが商品をつかうこと」
 “食”をつくるという立場も流れもおなじです。



(イ) 商品をつくる場面と商品を使う場面を考え、“食”をつくる上での類似点に気付かせる。

(ウ) 地球を守るために何ができるかを具体的に考え、環境課題に対し自分事と捉え、すすんで行動しようとする。

V 成果

単元前後の意識調査から、今年度、消費者視点だけでなく生産者視点で授業を実施したことで、生産から消費の繋がりを捉え、多くの児童が環境問題を自分事として考え、「今の自分にできること」を考え、行動しようとする姿勢へと変容していったことが分かった。

※研究詳細はホームページをご覧ください。